

20周年誌を発行した
「横浜やまびこの里」

横浜やまびこの里
東やまた工房／
横浜市発達障害者支援センター
関水 実



横浜やまびこの里は、横浜市の自閉症児者親の会（横浜やまびこ会）が設立母体となった社会福祉法人です。平成元年11月に創設され今年21年目を迎えました。創設当時は、十分な教育や福祉のサービスを受けていると言い難かった自閉症者。その障害の特性に配慮した援助のできる社会福祉法人を作ろうと、親達が設立までに7年をかけ、「一人がみんなのため、みんなが一人のため」＝「自分のことだけ考えない」の理念のもとで親の会全体の運動として取り組みました。

開設時には、「個別化、構造化、視覚化」など自閉症の障害特性に配慮した支援法も、自閉症専門施設という固有性も、「ただでさえ人間関係の弱い自閉症だけ集めてどうするつもりか」など多くのご批判もいただきました。しかし自閉症に対する世の中の理解の進展とともに、法人の活動に対するご理解も深まったように思います。

現在、自閉症はその障害の概念自体が広がり、自閉症スペクトラム（連続体）として捉え直されています。つまり知的障害を伴う自閉症から、知的障害を伴わない高機能自閉症、アスペルガー症候群へと概念は広がり、さらには、発達障害の中核的な障害と位置づけられています。虐待、引きこもり、不登校、ニートなどの社会現象の背景に、発達障害の問題が深く内在していることが明らかになってきています。

横浜やまびこの里も、8年前に、横浜市発達障害者支援センターを開所しましたが、その相談の多くを高機能群が占めています。今年、親の会による設立準備の段階から、現在までの20年の自閉症支援に特化した法人の活動を記念誌としてまとめました。希望者に実費配布（1000円）しています。お問い合わせは、横浜やまびこの里045-591-2728（管理部柳生まで）

苦しいものであったと思われま
す。その時の記憶は、退院後の同
居を家族にためらわせるものとな
ります。そうした家族の想いに対
して、塩田さんは、相談事業所や、
デイケアスタッフ、訪問看護事業
所など、実際に退院後に関わる方
たちと家族が顔を合わせる会議を
開催することで、家族だけが支え
なければならぬのではないこと
を、丁寧に伝えていきます。

合もあります。尾山さんは、病院
の家族教室で自身の経験を語りま
す。「精神障害のある本人が、退
院して地域で暮らしていることを
知ってもらい、家族にも当事者の
可能性を想像できるようになって
もらいたい。そうすることで家族
の気持ちが少しでも楽になったら
…」尾山さんの願いです。

つながり、地域ケアの広がり

塩田さんは、「本人の退院後の
住まいを検討したくても、身寄り
がなく保証人が見つからず借りら
れない。グループホームも満員で

住む場所が不足している。さらに、
本人の生活に、日中通う場所も大
切となるが、地域作業所など通う
場所が少なく、選べるところが限
られている」と、地域資源がまだ
まだ不足していることを課題にあ
げます。地域で受け皿となるサー
ビスや資源が整わないと、なか
か退院できない実態があります。

しかし、関係者同士の顔の見え
るつながりを築いていくことで、
地域で支える取り組みは少しずつ
広がっていきます。「日常的に地
域でどう支えるか、本人の病状を
どう捉えるか、緊急時には誰が対
応するかなどを、話し合っていく
ことで共通認識を作る。それが本
人の地域での継続した生活を支え
る助けになる」と塩田さん。

地域の中で、本人・家族が生活
していけるようになるために、関
係者の連携とともに、近隣住民等
も含めて、どう受け止め、お互い
に支えあう関係づくりを進めてい
くのか。これからの地域づくりを
進める上で、私達が考えていかな
ければならない重要な視点なので
はないでしょうか。

（企画調整・情報提供担当）